宇宙生命哲学 ことはじめ 41

北里環境科学センター
名誉顧問／宇宙生命哲学者
伊藤　俊洋

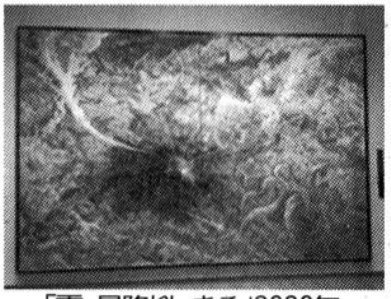
遠藤彰子画伯の世界と「宇宙生命哲学」

相模原在住の日本を代表する洋画家、遠藤彰子画伯の「物語る遠藤彰子展」が平塚市美術館で開催中である。「楽園」シリーズ、「街」シリーズ、「大作」シリーズなど、38点の絵画と6点の彫刻が展示されている。

遠藤さんの絵には、不思議な魅力がある。絵の前に佇むと、時空を超えた多次元の空間を遊泳しているような錯覚に陥る。作者の視線が、常に宇宙空間から地球を眺め、地球上で繰り広げられる生命現象を、様々な角度から切り取って時空を超えた物語として描かれているように見える。そこには、私がこれまで経験したことのない壮大な宇宙観、生命観、人生観が描かれている。遠藤さんは、何時、どのようにしてこのような境地にたどり着いたのだろうか。

遠藤さんは、若いころ読んだ論述に大きな衝撃を受け、大作シリーズの制作につながった、と述懐されている。それは、以下に紹介するアインシュタインによるものであった。

「人間とは、私たちが「宇宙」と呼ぶ全体の一部であり、時間と空間に限定された一部である。私たちは、自分自身を、思考を、そして感情を、他と切り離されたものとして体験する。これは、意識についてのある種の錯覚である。この錯覚は一種の牢獄で、個人的な欲望や最も近くにいる人への愛情に私たちを縛り付けるのだ。私たちの務めは、この牢獄から自らを解放することだ。それには、共感の輪を、すべての生き物と自然全体の美しさに広げなければならない。実質的に新しい思考の形を身につけなければ、人類は生き延びることができないだろう」（アルベルト・アインシュタイン）



「雪、星降りしきる」2020年
333.3cm × 497cm平塚市美術館
（2021.10.2撮影 伊藤佑子）

この論述は、「宇宙生命哲学」の本質と相通じるものである。しかし、錯覚という牢獄に閉じ込められたままでは、地球の未来は、絶望的である。人類の文明は、まだ未熟で成長過程にある。人類は、狭い揺り籠の中でぬくぬくと怠惰な生活を貪っている。我々は、時空を超えて、過去から現在、さらに未来へとつながる生命の循環の中にいる。我々は、全ての生物と共存しながら、「宇宙船地球号」の水先案内人としての高い意識と誇りを持って、素敵な地球人になる終わりのない練習を続けなければならない。

私は、遠藤彰子という紛れもなく素敵な地球人を、平塚市美術館で再発見した。「物語る遠藤彰子展」は、12月12日に終了するが、絵画の映像、解説、講演、ワークショップなどを、YouTubeで見ることができる。